

教員の授業力意識の変化から若手指導を考える

— より良い授業の意識調査から —

所属校：多摩市立北諏訪小学校

氏名：鶴田 昭彦

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：授業力・自覚化・授業意識・授業力構成要素

I 研究の目的

職人は、ベテランの傍らにいてその技を盗み、経験を積み重ねて匠になる。そして、ものづくりの本質を身に付ける。教員は様々な研修によって自らを向上させている面もあるが、実は職人と同様に、先輩教員の方法を見て盗み、自ら実践し、失敗を繰り返しながら10年近くの年月をかけて、授業の本質「在り方」を学び、自分の技を確立しているのである。

今日、教員の質の低下、学力低下問題、脱ゆとり等、多くの教育問題がマスコミで取り上げられる中、職人のように10年で一人前の教員となるのでは、保護者からの期待に添うことはできない。そのため、多くの自治体では、若手育成のための授業力向上プランが実施されるようになった。

若手の大量採用に伴い、若手教員向けの教育書が多数書店に並ぶようになった。『最近の教育マニュアル書は、「やり方」ばかりに目が行き、そればかりを習得しようとするのが目立ってきています。しかし本当に大切なことは「やり方」を支える「在り方」なのです』¹と、千葉県教育センターは指摘している。授業力向上プラン等で活用されている多くの授業力チェックシートも「やり方」を確かめるものになっていて「やり方」を支える授業の「在り方」を念頭に置いているものは少ない。「やり方」を身につけるだけでは、教員として自分の技を確立するのは困難である。

産業教育学で技術・技能の伝承方法を研究している森和夫は著書の中で『技術・技能伝承の出発点は、技能者の「気づき」から始まる。』²と記している。実は、教員の技術・技能の伝承にも同じことが言えるのではないかと考える。森の考えから推察すると、ベテラン教員と言われる技能者が経験から身につけ無自覚に行っている授業技術・技能は、ベテランが自分の技術・技能に気づかない限り伝承されにくいことになり、若手育成のひとつの壁になっていると考えられる。

そこで、本研究では、教員の力量を支える授業力を、教員の無自覚な行動、自覚的に行っている行動を中心に検証した。「やり方」を身につけるのではなく、授業の「在り方」から自分の授業スタイルを確立するため、教員の授業に対する意識調査から授業技術・技能の習得について調査研究を行った。

II 研究の方法

① 授業力形成過程の研究（文献・先行研究）

教員がどのように授業力を身につけ、伝承してきたのか、及び、職人がどのように技能伝承を行っているのかを、文献・先行研究から調査をした。

② 調査研究（意識調査）

ア. 教育実習生（3クラス 12名）

担当教員が無自覚的に行っている指導方法を教育実習生が見て学ぶことができたかどうかを、授業観察、授業実践経験の差の少ない教育実習生を対象として、意識調査・聞き取り調査を行った。

イ. 現職教員（都内現職教員 45名）

現職教員が授業において自覚し、意識的に行っている「より良い授業のために大切にしていること」を知るために、初任者・2～10年経験者・20年以上経験者にアンケート調査（より良い授業意識調査）を行った。

③ 「より良い授業の意識調査」の作成・分析

教師が授業において意識的に行っている行動を明らかにするために、「より良い授業を行う上で大切なものは」という設問に対する自由記述のアンケート調査を行い分析した。

④ 「より良い授業の構成要素」の作成

「より良い授業の意識調査」をもとに授業力の分類を行い、先行研究と上記意識調査から「より良い授業の構成要素」を作成した。

¹ 千葉県教育センター『読本 達人に学ぶ授業力』2010

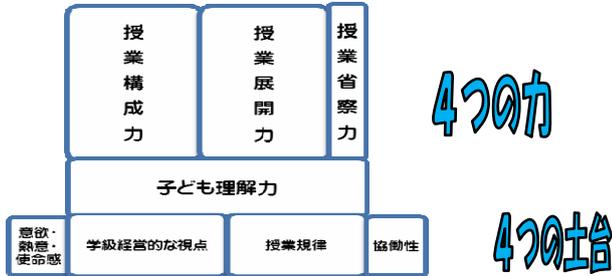
² 森 和夫著『技術・技能伝承ハンドブック』JIPMソリューション2005

Ⅲ 研究の結果

(1) より良い授業の構成要素

先行研究と意識調査を元に、より良い授業の構成要素を「授業を支える4つの土台」と「授業を作り上げる4つの力」に分けて、次の8つに分類した。

より良い授業の構成要素



① 授業構成力

授業前に教材の分析を的確に行い、教材を選択・開発する力。また、単元や各時間のねらいを明確にとらえ、児童の実態に応じて授業を計画する力。

② 授業展開力

ねらい達成のために、発問や指示を適切に行ったり、必要に応じて適時、学習形態を工夫したり、授業の流れの中で展開を修正したり、構造的に板書したりする力。

③ 授業省察力

授業を冷静に振り返り、次時の授業を再構成する力。

④ 子ども理解力

学習に対する児童の知識・興味関心・能力や学びの様子を把握し、子供一人一人に対応する力。

⑤ 学級経営的な視点

子供が安心して発言、活動できるようにする支援や学級の雰囲気作り。

⑥ 授業規律

授業を進めるために必要な子供の姿勢。

⑦ 意欲・熱意・使命感

教師としての授業に対する熱意等。

⑧ 協働性

同僚や先輩教員との打ち合わせや、相互研鑽。

(2) 成長する教師

「よりよい授業の意識調査」から、教職経験により授業を行う上で意識していることに違いがあり、特徴があることがわかった。それを特徴別に以下のように4つに分類した。



① すりこみ期（教育実習期間）

指導教員の授業観に左右され、影響を強く受ける。指導教官が意識して伝えた授業視点以外は、なかなか伝わらない時期。

② はこめがね期（初任～6・7年目）

目の前に見えるものを意識する時期。授業構成力を強く意識する。構成力とあわせて授業規律についても指導上大切だと考える。

③ 転換期（8・9年目～）

授業構成力から授業展開力に意識が変化し始める時期。計画した構成よりも、子供に対する声かけや指示の仕方に目が向く。

④ 拡散期（20年目～）

ベテランと言われる年代になると、授業意識の個人差が大きくなる。今のクラスの課題や学校での立場や役割等で意識する項目が大きく変化する時期。また、できるようになったことは意識調査では、より良い授業に大切な項目として記入しない場合があることもわかった。

Ⅳ 考察

若手教員の育成の視点は、授業を進める上で大切な、構成力・展開力をバランスよく育てることである。その際、若手が意識しにくい展開力を意図的に指導することに大きな意味がある。経験10年未満でバランスのとれている教員の多くは、低学年等を担任することで、展開力を意識するきっかけとなっていると語っていた。大人の会話が通じにくい低学年を担当すると、教師の意図を伝えるために、子供の反応を見ながら様々な工夫をする。それが、その後の授業展開力につながっていると考えられる。

教員の授業力向上には「やり方」を詰め込むのではなく、授業の「在り方」を見とるための視点を伝え、若手教員が自ら考え吸収する機会を与えることが大切である。

なぜなら、若手を指導する際にベテランの無自覚な指導技能は若手に伝わらないからである。よって、まずベテラン教員が、今回明らかになった8つの視点を意識し、自らの授業を振り返ることが大切である。さらに意識内容を言語化することである。そのように意識し言語化された内容は、若手指導の重点になりうるのである。このように、ベテランは改めて、自身の授業が多くの視点から成り立っていることを再認識する必要があり、自分の無意識の技能を自覚し伝えられる言葉に変え、若手育成に生かすことが大切である。